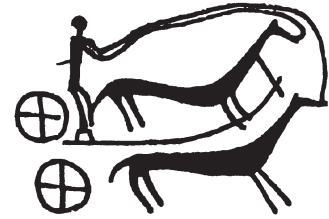


ニューズレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 84



高等教育推進機構として新たな出発 (4 ページ)

第2回大学院生のための大学教員養成 (PFF) 講座 (12 ページ)

「博物館ボランティアの集い」参加者を募集 (16 ページ)

第1学期学習サポートの利用状況 (21 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

総合入試の導入にあたって

副学長・高等教育推進機構長 脇田 稔

総合入試とは何か

ご存じの方も多いと思いますが、北海道大学は来年度平成23年春の入学試験から「総合入試」を導入します。これは、進学先学部、専攻、あるいは専門分野を決めずに入学し、一年間北海道大学の教育、研究、教員の個性を十分理解をした上で、2年次に進級の折、自分の学びたい学部、専攻、専門分野に移行するという制度です。いわゆる「大きく入り試」と呼ばれている入試方式です。

この件については、ほぼ10年かけて議論してきましたが、このたび実施に向けて全学の合意が得られました。

北海道大学は、入学試験の多様化を進め、分離分割方式を維持するという国大協の方針を保ちながら、このような入試の改革をしました。この改革により図1のように、本学の試験機会は、AO入試、

前期日程、後期日程と3回提供され、学力試験を課さないAO入試、学部別学力試験、総合入試と3種類の入試が実施されます。AOは受験資格が特殊なので、誰でもが受験できるわけではありませんが、少なくとも前期、後期の2回の受験機会は確保されています。

この総合入試導入とともに、部局による入試対応が少し変わりました。文系のAO入試が廃止される一方、医学部ではAO入試が新たに導入され、医学部医学科の後期試験が廃止されました。

所属する学部あるいは学科、専攻を決めずに入学する方式を導入する理由は次の様なものです。

一つは、大学進学を志す高校生あるいは大学受験



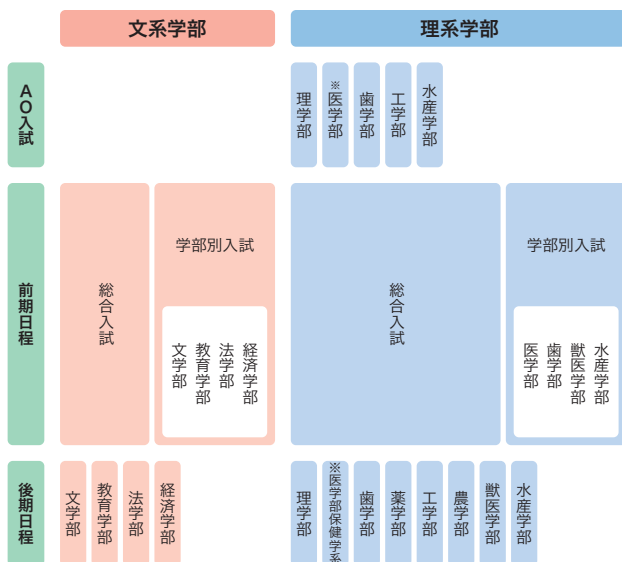


図1 北大募集単位概念図

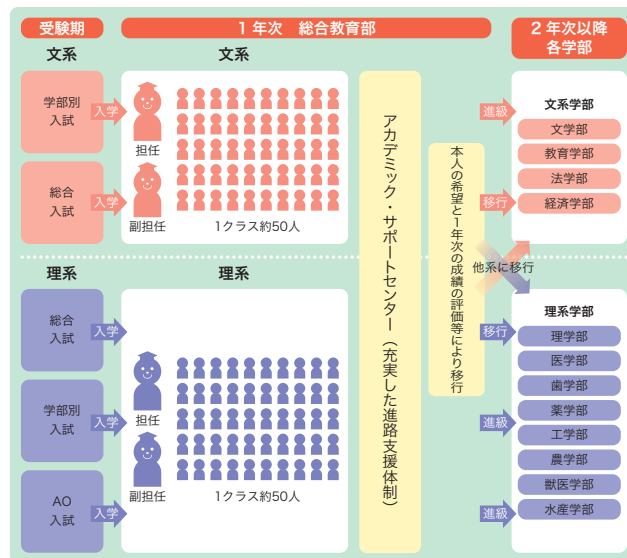


図2 総合教育部について

生の進路選択能力の低下が見られることです。能力がないというより余裕がないといった方が適切です。受験戦争と周囲からあおり立てられ、「行きたい」より「入りたい」が優先し、大学で何を学んだらよいかをじっくり考えている余裕がないと思われます。はっきりとした勉強の目標が無く入学した学生は、入学してもさらに勉強を続けるという意欲が起きてきません。

もう一つは、大学の中身がその看板からは分かり難くなっていることです。学部、専攻、講座あるいは専門分野の名が、学問の細分化と専門分化にともなって、多くは伝統的な名称から“今、そこでやっている”内容を示す表記に変わっています。また伝統的な分野名称にそぐわない新しい学際的な分野もあります。このため、受験生にとって分野名あるいは組織名からその中身、つまりそこで行われている研究と特に教育を想像することが難しくなっています。受験生が専門分野の実際の中身を知らずに、看板から内容を推測しただけで入学すると、「こんなはずではなかった」「こういう分野とは知らなかった」という違和感、時には失望感を味わうことになり、これも入学後の勉学意欲をそぐ原因となっています。

このような、入学前の予想と入学後の現実のミスマッチは、結果的に学生の長期欠席、不本意な休学や退学などにつながり、大学としては大切な人材を

失うこととなります。

さらにもう一つは、毎年行っている新入生へのアンケートでは、「とにかく北海道大学に入りたかった」「北海道あるいは札幌で生活したかった」という進学理由を挙げる学生が50%近くあります。

以上のマイナスとプラスの大きな要素だけを取り上げても、本学進学を望む学生が、行き先を決めずにまず入学し、1年間の学習や学生生活を通して「本当に自分が学びたいこと」をはっきりさせ、自分にふさわしい学部・学科を選ぶことかできる制度を導入することは、入学する者にとっても、受け入れる大学にとっても意義が大きいと考えました。

このような「総合入試」制度は、残念ながらいろいろな理由ですべての学部にも均等に適用されてはいません。募集人員2485名の中で、総合入試枠は1127名(45%強)、文系100名、理系1027名で、すべて前期日程で実施されます。理系には理、工、農、薬4学部の全定員と、医、歯、獣医、水産の定員の一部が含まれます。今後、各学部で総合入試の割合が増えていくことを期待しています。

総合入試で、全学教育はどう変わるか

1. 学生の所属

従来は、学部別入試で入学した学生は、それぞれの学部で1年次生として所属し、全学教育部で提供するカリキュラムから、所属する学部が指定する科

目を受講し、必要な単位を取って進級していました。

来年度からは、いろいろ変わります。まず、様々な入試によって選抜され入学した学生は、全員「総合教育部」の所属になります。そして、文系は総合入試クラスとして、学部別クラスとは別の2クラスを編成しますが、理系は、受験した入試形態とは無関係に、50名を一クラスとして、全部で37のクラスのどれかに所属します。各クラスには、理系のすべての学部と総合入試入学者が混在することになります。これが最大の特徴です。

総合教育部では、文系、理系それぞれ一種類の統一カリキュラムで教育されることも新しい特徴です。今まで本学で培ってきた全学教育科目を精選した、共通の教養教育、基礎教育をみっちり行います。従って、取得単位要件を示した実行教育過程表も、基本的には文系、理系一種類となります。ただ理系でも医学部医学科は理科での要件の設定が、同保健学科は指定単位数が異なります(図2)。

単純にはなりませんが、基本的には従来の全学教育科目の柱であったコアカリキュラムの仕組みは変わりません。また今まで通り全学教育としてその内容は全学の全学年に提供されます。

このようにして一年間じっくり学んだのち、学部別入学生はそのまま学部に進級しますが、総合入試の学生は、2年次へ進級するとともに学部・学科へ移行します。本人の希望と1年次に修得した科目の成績評価により、移行する学部・学科(一部の学部では専攻、コースまで)が決定されます。移行先

決定作業は、コンピューターのプログラムに従って進行します。全ての手続きを通じて、学生が希望しない学部・学科等へ移行することはありません。

2. 学生支援体制

総合教育体制では、クラス編成が学部単位でないため学習や日常の大学生活に問題を抱える学生が出てくると考え、クラス編成が従来と変わることへの対応として生活並びに学修に対する支援を充実するとともに、総合入試入学学生の進路選択にも十分な支援体制を準備しました(図3)。

1) クラス担任制度の充実

各クラスには、クラス担任、副担任がつき生活や学習など全般的な指導をします。

2) アカデミックサポートセンター(ASC)とピアサポートセンター

大学に入る前と入ってからでは、同じ科目名でも考え方、進め方、学び方に一般的に大きな差があります。このため入学後にスムーズに大学教育のペースに乗れるよう、また途中で意欲を保てなくなった場合の支援を充実します。

ASCにはベテランの教員経験者をアカデミック・アドバイザーとして配置し、学生の迷いなどに的確なアドバイスを与えられる様にします。

同時に、昨今の学生の気質にも対応して、上級生による日常生活や学習上の様々な相談に応じるピアサポートセンターも開設します。

総合入試で入学すると、1年間の大学生活の後に

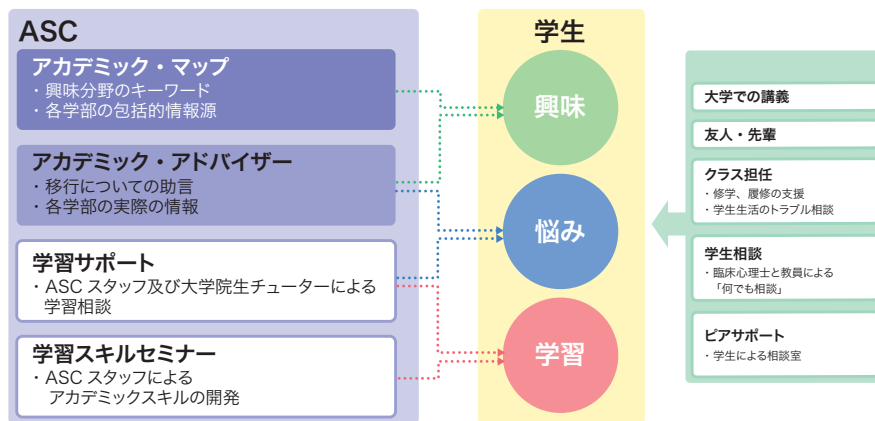


図3 充実した進路支援体制

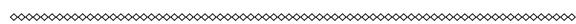
自分の興味や適性に合った進路を選べるという大きなメリットがある一方で、多くの分野に関心が生じてかえって進路決定に迷いがでるかも知れません。北大の各学部・学科での学問と研究を分野やキーワードごとに整理した各種のマップで、直感的に自分の興味分野とそれを学べる可能性について知ることかできます。このような「アカデミック・マップ」は冊子とオンラインの両形式で公開されます。これで入学前には思いもしなかった専門分野への移行を決める者も出てくるでしょう。

3) 学生相談室と保健センター相談室

学部別のいわば身内だけのクラスで生活していても、人間関係や修学にもとづく様々な問題を抱える学生は出ます。総合教育はクラスの中で様々な特徴を持つもの同士が切磋琢磨する方式ですから、今ま

でと異なる悩みを持つ学生も出てくるかもしれません。これらの多くの悩み相談の窓口として、従来の学生相談室を拡充し、また保健センター相談室も近くに移転してきたことを機に相談体制を充実し、学生の様々な悩みに対応する準備を整えています。

総合入試の導入とこれに伴う1年次の新しい教育体制を確実に進めるために、今まで高等教育機能開発総合センターと全学教育部で実施してきた全学教育実施体制を変更しました。各部局の協力を得て、高等教育推進機構を設置し、その中に、全学教育部、総合教育部、教育研究部、教育支援部の4部を置き、全学的協力のもと、一年生に総合教育を行う体制を整え、本年10月1日から動き始めました。全学の教職員、学生の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



高等教育推進機構として新たな出発

総合入試の導入にともない、高等教育機能開発総合センターは10月1日より「高等教育推進機構」として新たな門出をしました。

本学学士課程の「教養科目」と「基礎科目」を合わせた「全学教育科目」の企画・立案は「全学教育部」が行います。

1年次学生の修学指導と学部移行の選考は「総合教育部」が行います。

「高等教育研究部」は、高等教育開発研究部門、生涯学習計画研究部門、入学者選抜研究部門、科学技術コミュニケーション教育研究部門の4部門から構成され、本学の教育改革に資する実践的な研究と教育を行います。

「教育支援部」には、アカデミック・サポートセンターと自然科学実験支援室が置かれ、教育活動の支援を行います。

各部門の先進的な活動は、今後も本誌で紹介されますのでご期待下さい。

なお、機構としての再編にあわせて本誌の名称も、センターニュースから「ニュースレター」に変更しました。
(細川 敏幸)

高等教育推進機構 Institute for the Advancement of Higher Education
全学教育部 General Education Division
総合教育部 First Year Education Division
高等教育研究部 Higher Education Research and Development Division
教育支援部 Educational Support Division

東北・北海道地区大学一般教育研究会

9月2日、3日に札幌大学で第60回東北・北海道地区大学一般教育研究会が開催されました。

初日は、午前中に総会、全体会が開かれました。全体会では、全体テーマ「学士力はどのように保証されるか」に基づき、札幌大学の宮腰昭男学長が、同大学における「学士力保証と共通教育」に関するさまざまな取り組み、工夫について紹介されました(写真1)。

午後からは3つの分科会が行われました。第1分科会は「学生の自律性を育む取組」、第2分科会は「他者・異者と協力する力を育む取組」、そして第3分科会は「学生のリテラシーを高める取組」というテーマで、各分科会に7件ずつの話題提供がありました。

本学からは分科会に4つの話題提供を行いました。第1分科会では、「北海道大学における自律性育成プログラム」として、「北大元気プロジェクト」や「学生ボランティア活動相談室」、「ピアサポート室」といった本学のさまざまな学生支援活動について、工学研究院の近久教授が発表しました。

次いで高機能センターの山田特任准教授が「『選択』から『主張』へ～次世代型クリッカーへの取り組み」と題して、デジタルペンをクリッカーとして用いる新たな方法について発表しました。学生主体の支援活動や次世代の技術・機器の利用に、参加者

からの興味が集まりました。

第3分科会では、理学研究院の小野寺教授が、「大学間連携による自然科学実験の実施と科学リテラシー育成の試み」として、自然科学実験施設・機材の他大学への開放による、大学間連携・協働の実験教育について事例紹介を行いました。

次いで「北海道大学における初年次学生の主体的学習を支援する活動」として、本学アカデミック・サポート推進室による「学習スキルセミナー」と「学習サポート」について、齊藤が報告しました。参加者からは具体的な運用・実施方法や参考事例に関する質問などが寄せられました(写真2)。

2日目の全体会では、関東学園大学の瀧上豊教授が全体テーマに関わる取り組みとして、同大学が推進するコンピテンシー教育について紹介されました。続いて行われた総会では、本研究会が近年の大学教育総合化の動向を受け、その研究対象を一般教育から専門教育にまで広げているという実態にあわせ、研究会名を「東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会」と改称することなどを議決し、全日程が終了しました。

次回第61回研究会はこの新しい名称で秋田大学にて、また2年後は酪農学園大学にて開催される予定です。(齊藤 準)

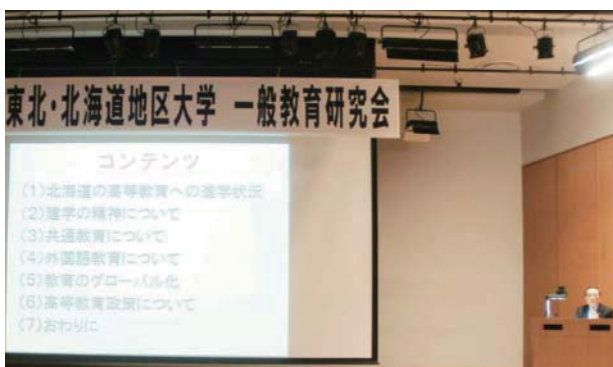


写真1 基調講演の様子



写真2 分科会の様子

北大教育 GP 「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」 における社会体験型科目の成果と課題

総合博物館 准教授 湯浅 万紀子

総合博物館には様々な学部や大学院の学生が集い、企画展の展示制作や展示解説、常設展示のリニューアル、ガイドブックやキャンパスマップの制作、ミュージアムショップのグッズの企画開発等に取り組んでいます。平成 20 年度より連続して開催している卒論ポスター発表会では、様々な学部の 4 年生が卒業研究を 1 枚のポスターにまとめ、ポスターの前に立って来館者に説明し、質疑応答しました。これらは、北大教育 GP 「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」(平成 20～22 年度)の社会体験型科目の一環であり、参加学生数は延べ 150 名を超えました。

本誌前号の記事で紹介したように、この科目は GP のユニークな教育プログラムで、協調性と自主性、自己評価の視点を持った学生を育てることを目的としています。一部は授業として開講していますが、多くは様々な学部の学生が参加するオフカリキュラムです。本稿では、社会体験型科目のオフカリキュラムのプロジェクトの一部を紹介し、その成果と課題をまとめます。

各プロジェクトの終了後には参加学生に考察レポートを課しています。レポートとプロジェクトの進行過程は、教育 GP の HP (<http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/projects/edu-gp08/>) をご覧下さい。

企画展の展示制作・展示解説

「疋田豊治ガラス乾板写真」展と「花の白露交流史」展(いずれも平成 21 年度)、「アラスカの恐竜」展(平成 22 年度)(写真 1)では、学生達が展示制作と展示解説に参加し、「生物多様な部屋」展(平成 21 年度)では展示解説に参加しました。展示制作では、企画展のメッセージを来館者に的確に伝える方法を模索して博物館担当教員やスタッフと議論を重ね、解説パネルやキャプション、館内の誘導サイン、関連マップ等を制作し、展示の設営・撤収や関連セミナーの運営等を担当しました。特に、疋田展では、疋田写真を博士課程の研究テーマとする大学院生を中心に、展示内容の検討にも学生が深く関わりました。展示解説では、日時を決めたギャラリートークを行ったり、フロアに待機して随時解説を行いました。企画展担当者や博物館教育担当者が指導に当たったほか、それぞれの展示内容を専門に研究する大学院生や博物館ボランティアとの交流を通して来館者との交流に必要な知識やスキルを学びました。展示解説を担当する度に考察レポートを担当教員に提出し、教員から得たコメントを次回の解説にフィードバックし、解説を重ねていきました。

ミュージアムショップのグッズ開発

平成 21 年度より毎夏、ミュージアムショップで

写真 1 「アラスカの恐竜」展における展示解説

写真 2 平成 22 年度総合博物館オリジナル T シャツ制作

販売する博物館オリジナルTシャツ制作プロジェクトに学生が参加しました。札幌を拠点に海外でも活躍されているアーティストの安藤文絵さんと博物館担当教員の指導のもと、学生一人一人が心に響いた当館の展示物や展示空間をTシャツのデザインに落とし込み、平成21年度は4つ、今年度は2つのデザインが商品化されました(写真2)。

ミュージアムショップで販売するにふさわしいデザインを検討する過程で、学生達は何度も来館して見慣れている筈の当館の新しい魅力を発見したとのこと。彼らは、ミュージアムショップの関係者とも議論し、Tシャツのデザインだけでなく、色とサイズの選定も担いました。更に、Tシャツに同封するメッセージ冊子の制作、ポスターの制作、ミュージアムショップのディスプレイも全員で協力して担当しました。そして、来店者へのインタビューを実施し、本プロジェクトの成果を検証しました。

卒論ポスター発表会

平成20年度から実施している卒論ポスター発表会は、学部を横断した卒論ポスターの市民向けの発表会であり、本学では初めての試みとなりました。平成20年度は文、理、工、農学部の15名の4年生が、平成21年度は文、教育、経済、理、農、水産学部の9名の4年生が参加しました。教育GPのプログラム・コーディネータがポスター制作に不慣れな文系の学生を支援し、理系の学生にも自身の研究を市民に対していかにわかりやすく伝えるかを助言し、担当教員がコミュニケーション方法について説明しました(写真3)。

展示室を会場に開催された2日間の発表会では、



写真3 平成21年度卒論ポスター発表会

発表者はポスターの前に立ち、来場者に自身の研究を明快に説明する努力を続け、質疑応答を重ねました。多くの市民にご来場いただき、会場は熱気に溢れました。そして、市民5名と北大教員5名から成る審査員の審査による優秀賞と、2日間の来場者の投票による来館者賞が、館長よりそれぞれ1名に授与されました。

社会体験型科目の成果と課題

いずれのプロジェクトにおいても、学生達の取り組みの様子や考察レポートから、来館者の視点を意識して自らが博物館と社会とのインターフェイスとなり、様々な学部の学生や博物館スタッフと協働して1つのプロジェクトを運営することで、コミュニケーション能力と協調性、自主性を身に付けていった様子が窺えます。そして、来館者からの反応を間近に受け、プロジェクトの成果と課題を検証する考察レポートをまとめることで、自己評価の視点を獲得していったことが窺えます。

特筆すべきは、プロジェクト終了後に、他の社会体験型科目に積極的に参加したり、博物館ボランティアに登録して、博物館活動に継続して参加する学生がいることです。函館キャンパスの水産科学館の展示リニューアル・プロジェクトを提案して実現させた学生もいます。今後は、博物館からプロジェクトを提案して参加者を募集するだけでなく、学生側からの積極的な提案を受けてプロジェクトをたちあげる展開にも期待しています。

一方、オフカリキュラムのプロジェクトでは、参加学生のミーティング時間の調整が困難で、欠席者には個別指導を行っていますが、運営には課題も残されています。また、プロジェクトに参加する学生の数は全学の観点からはまだ少なく、全学生にプログラムを周知できていません。関心を持って取り組む学生を増やす一方で、学生数ではなく、その質も評価するシステムを構築していくことが重要です。

社会体験型プロジェクトは学生達にとって意味ある取り組みとなっているうえ、多くの来館者から、学生を通して北海道大学や総合博物館を知る機会になったとご好評をいただいています。上記の課題に取り組みながら、今後も北大教育GPの特色を活かした学生教育を推進していきたいと思えます。

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告 (第 81 回)

平成 22 年 8 月 2 日 (水) に第 81 回全学教育委員会 (平成 22 年度第 2 回) が開催され、以下の議題について話し合いました。

議題

1. 総合科目「学問の世界 (仮称)」の開講
2. 平成 23 年度以降の文系基礎科目の授業科目の内容
3. 初習外国語の選択方法の変更
4. 2つ目の初習外国語の履修
5. 外国語演習の開講取消しに関する方策
6. 平成 23 年度全学教育科目の開講計画
7. 外国語演習 [講義題目：海外短期語学研修 (仮称)] の開講
8. 共通科目の配置の見直し

報告事項

1. 成績評価・授業評価結果検討部会からの報告
2. 平成 21 年度第 2 学期自由設計科目の利用状況
3. 平成 21 年度第 2 学期全学教育における単位の実質化に関するアンケート調査
4. 平成 22 年度第 1 学期履修者数
5. 平成 22 年度第 2 学期の履修調整
6. 英語単位「優秀認定」の実施
7. 英語Ⅲ及びⅣにおける履修クラスの抽選
8. 平成 22 年度第 1 学期成績公開及び確認期間
9. TA 研修会の参加状況
10. 全学教育における流用定員の解消状況
11. 北海道大学附属図書館北図書館委員会委員の推薦
12. 平成 21 年度初習外国語Ⅱの CALL 授業に関する報告

総合科目「学問の世界 (仮称)」の開講

平成 23 年度の総合入試導入後に、多様な学部・学科・専門分野の紹介を行う総合科目「学問の世界」を開講することになりました。

平成 23 年度以降の文系基礎科目の内容

平成 23 年度以降の「新しい文系基礎科目の授業科目の内容」の検討を行い、最終的に、文学部からは「人文科学入門Ⅰ～Ⅴ」、教育学部からは「教育学入門Ⅰ・Ⅱ」、法学部は現在検討中、そして経済学部からは「経済学・経営学入門Ⅰ～Ⅲ」という各学部が関係する学問分野の名前を冠した授業科目が開講されることになりました。

初習外国語の選択方法の変更

入学願書に初習外国語の選択希望科目を記入する現行の問題点を踏まえて、新たな方法を検討することになりました。最終的に、入学手続きの際 (3 月) に入学予定者が選択希望科目を申請する方式に変更することになりました。

2つ目の初習外国語の履修

能力と意欲のある学生に、2つ目の初習外国語についても十分な学習機会を確保するため、初習外国語 4 単位を選択科目として履修できるようになり、その実施方法が定められました。

外国語演習の開講取消しに関する方策

外国語教育センター教員以外の教員が担当する外国語授業については、2年程度 (平成 21～22 年度) は、開講取り消し措置の適用を猶予することとしていましたが、平成 23 年度以降その猶予措置を廃止することになりました。これにより、平成 23 年度からは、履修希望者が 3 名以下となった授業科目では、他と同様、開講取り消しとなります。

平成 23 年度全学教育科目の開講計画

平成 23 年度の全学教育科目の開講計画を各部署に依頼する案が承認されました。現在この案に基づき、開講計画を立案中です。

外国語演習「海外短期語学研修」の開講

外国語圏の教育機関において2週間以上の短期語学研修を授業内容とする授業科目を、平成22年度第2学期から「外国語演習」に開講し、講義題目は「海外短期語学研修」とすることになりました。

共通科目の配置の見直し

学生の授業科目選択の便宜を図るため、実行教育課程表において「共通科目」の位置を「教養科目」の最後に移すことにしました。

成績評価・授業評価結果検討部会の報告

平成21年度第1学期の成績評価において「片寄りがある」とされた科目への照会結果等、および2学期の成績評価に関する照会対象者の報告がありました。

総合入試導入を控え、平成21年度2学期より、GPAの許容幅を1.90～2.90に変更したことが報告されました。

自由設計科目の利用状況

平成21年度入学者より導入された自由設計科目について、平成21年度第2学期の利用状況が報告されました。最終的な変更者は927名に上り、全学平均で学期GPA、通算GPAともに0.02の上昇がみられました。また、平成22年1学期ではこの利用者について393名分の増加がありました。

平成21年度第2学期全学教育における単位の実質化に関するアンケート調査結果

平成21年度2学期の全学教育科目担当教員へのアンケート調査の結果が報告されました。今回の回収率は43.9%で、自由意見も全て掲載されました。今後もこのようなアンケート調査を継続し、単位の实質化に関する検証を行っていきます。

平成22年度第1学期履修者数

平成22年度第1学期の履修者数が報告されました。各科目の履修状況はほぼ前年通りです。履修取

り消しをした学生は延べ519名で、これも前年度と同程度です。

英語単位「優秀認定」

平成22年度の英語単位「優秀認定」の実施について報告がありました。ちなみに、平成21年度は、1学期128名、2学期24名の認定者がありました。

平成22年度第1学期成績公開及び確認期間について

学習簿はWeb上で公開され、成績確認期間は8月27日～9月2日までとなります。成績評価に関する学生からの申し立ては、この期間中に受け付けられます。

TA研修会の参加状況について

今年度の全学教育TA研修会は4月6日に行われ、278名が参加しました。

全学教育における流用定員の解消状況

平成7年度学部一貫教育体制に伴う流用定員については、外国語教育センターの7名以外すべて解消されたことが報告されました。

附属図書館北図書館委員会委員の推薦

附属図書館北図書館委員として、工学部の成田吉弘委員が推薦されました。

平成21年度初習外国語IIのCALL授業

平成20年度より、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語でCALL授業を導入しています。履修者数は、ドイツ語990名、フランス語462名、ロシア語64名、中国語667名です。最新のメディア機器を利用して、対面授業による教育効果とほぼ同等の効果を維持することが可能となりました。韓国語やスペイン語でのCALL授業の導入が今後の課題となっています。

(山口 淳二 理学研究院教授・センター長補佐)

クラス担任からひとこと

平成 21 年度 農学部 41 組・クラス担任 農学研究院 教授 川端 潤

大学というこれまでとは違った世界へ足を踏み入れた 1 年生にとって、クラス担任は初めて出会う身近な教員であり、その印象は大学生活への適応に重要な意味をもちます。

しかし、担任といっても高校とは違って毎日担当学生と顔を合わせるわけではありません。特に、農学部は 1 年生が大半の時間を過ごす高機能センターから物理的に遠く、学生にとっても農学部生という帰属意識がどうしても希薄になってしまう恐れがあります。そこで、私は週 1 回メルマガを発行しました(通年全 33 号)。内容は、農学部の行事や様子、季節の風物などの読んで肩の凝らない雑文が中心です。もちろん履修上の注意や学科分属の情報等の重要なお知らせも盛り込みました。携帯に転送しても読みやすいように、600 字程度で改行を多めにとるよう配慮しました。どの程度の学生がきちんと読

んでくれたかはわかりませんが、楽しみにしてますというレスポンスもあり、1 年生と農学部をつなぐ絆の一つとしてある程度の効果はあったのではないかと思います。

平成 23 年度からは総合入試の学生が入学し、各学部から選任されるクラス担任は、これまでのように自学部の学生だけではなく、まだ移行先の決まらない学生を受け持つことになります。心情的にはこれまでより少し距離が遠くなるかもしれませんが、学生にとっての北大の第一印象は大事です。ぜひこれまでと変わらないモチベーションで接してあげてほしいと願っています。

平成 21 年度 工学部 30 組・クラス担任 情報科学研究科 准教授 菅原 広剛

9 月末に分属を見届けた今、担任業務を振り返ると、ガイダンス等で全員に会うより進路相談や手続きなど個別対応が主でした。特に当組は留学生が 4 名と学年最多で、担任手引書に説明がない留学生関連業務を多く経験したので紹介します。

まず連絡関係では留学生向け開講案内や奨学金関係通知を取り次ぎました。メール連絡の際は当初英訳を添えたりもしました。

次に諸手続きでは資格外活動許可申請、在留期間更新時の留学生証明書交付申請、借間契約時の連帯保証人申請、帰省時の一時出国届などに担任印が必要で、これに付随してアルバイトの業種、時間、場所の制限や連帯保証人制度についても説明しました。

留学生経費関係では物品購入のほか、研修やチューターの手配をしました。研修旅行では職員同様の出張手続きに加え、研修先との調整や受入承諾

書発行依頼をしました。また留学生一人一人のチューターには時間に余裕のある研究室院生を付け、月々の勤務管理や謝金支払依頼をしました。

雑多な業務の中、学部や全学の留学生歓送迎会ではお相伴に与る役得もありました。特に全学の歓送迎会はホテルに関係国外交官らを招く盛大なもので、留学生への期待の程がうかがわれました。

手間取ることもありましたが、総じて担任業務は学修関連諸規程や学生支援制度を改めて知るよい機会でした。最後になりましたが、副担任葛西誠也先生と事務の皆様のご支援に感謝いたします。

高等教育 HIGHER EDUCATION

新時代の学習サポートを探る

～ IDE 大学セミナー開催される～

8月19日(木)～20日(金)に、今年度のIDE大学協会北海道支部のセミナーが本学との共催で、上記のテーマでホテル札幌ガーデンパレスにおいて開催されました。今回のセミナーでは、いかに学習サポートを整備し学生の学力向上を図るかについて、国内の実践的活動の事例を学ぶとともに道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう企画しました。

一日目の特別講演では、手厚い学習サポートで知られる金沢工大の藤本先生が、学生の自学自習を進めるために導入した、ネット上で操作できるKITポートフォリオシステムについて説明されました。一週間の生活、科目ごとの学習記録、到達目標の達成度の自己評価などをホームページ上に記録し評価するもので、修学活動の自己管理と自己評価からの気づきを促すことができます。また、学習支援のための数理工教育研究センターが設置され、授業と学習支援を担当する教員(約20名)、学習支援を専門に担当する教員(約10名)、数理工教育の活動を支援する職員(5名)を配置しています(写真1)。

次の特別講演では、大阪府立大学の高橋先生が、初年次数学教育の学習支援について話されま

した。数学グループは2年間かけて議論し、まず数学基礎学力調査を実施しました。さらに統一教科書を作成するとともに、学生の状況に応じて再履修クラスを設置しました。自習支援のためにはwebMathematicaシステムを導入し、自立学習を支援するために質問受付室を設置しています(写真2)。

二日目のシンポジウムでは、道内の大学の活動が報告されました。札幌学院大学からは学生支援室の活動について、釧路工業高専からは学習障がい者への支援活動について話されました。千歳科学技術大学では初年次の理数系教育の支援をどのように行っているかが報告されました。北大からは、昨年度に設置されたアカデミック・サポートとピア・サポートによる学習支援について報告がありました(写真3)。

なお、IDE大学協会は学会組織をとった高等教育研究の組織で、どなたでも加入でき、セミナーに参加(無料)もできます。詳しくは以下のアドレスをご覧ください。(細川 敏幸)

IDE 大学協会 (<http://ide-web.net/>)

表1 プログラム

・特別講演(19日)「金沢工業大学の学習支援システム」	金沢工業大学 教授 藤本 元啓
・特別講演(19日)「正課に連動した組織的数学学習サポート」	大阪府立大学 教授 高橋 哲也
・シンポジウム(20日)「北海道における学習サポート活動」	司会：北海道大学教授 細川 敏幸
「学習支援室の活動」	札幌学院大学 副学長 石川 千温
「学習障がいの知見から」	釧路工業高等専門学校 准教授 松崎 俊明
「千歳科学技術大学の初年次教育」	千歳科学技術大学 教授 山中 明生
「アカデミック・サポートとピア・サポートによる学習支援」	北海道大学高等教育機能開発総合センター 日吉 大輔
	北海道大学大学院国際広報メディア観光学院 岡本 健

写真1 藤本教授の講演

写真2 高橋教授の講演

写真3 シンポジウム

第2回「大学院生のための大学教員養成 (PFF) 講座：
ティーチングとライティングの基礎」を開催

本年3月に続いて7月21～27日に第2回「大学院生のための大学教員養成 (Preparing Future Faculty) 講座：ティーチングとライティングの基礎」が、カリフォルニア大学バークレー校・大学院機構の二人の講師（大学院生講師 (GSI) 教育支援センター長リンダ・フォンヘーネ博士と大学院生研究支援部長サブリーナ・ソラッコ氏）を招いて開催され、大学院生30人、チューター6人、見学者17人が参加し、大好評のうちに終了しました。

前回と同じく国際企画課国際教育連携支援チームと筑波大学教養教育機構の共催のほか、今回は水産科学研究院が共催に加わり、函館キャンパスでもテレビ中継を行い、大学院生17人が参加しました。

今回は、本ワークショップの成果に基づき、札幌会場では22人が大学院共通授業科目として、函館会場では14人が水産科学院の部局横断型特論として履修登録し単位認定を受けました。

フォンヘーネ先生とソラッコ先生のワークショップの内容は基本的に前回と同じです。

(フォンヘーネ：ティーチング)

- 2. ティーチングの基礎
- 4. 授業のシラバスと学習目標の設計
- 7. 評価基準の作成と活用
- 8. 大人数授業の運営方法

- 10. 職務規定と教育倫理
(ソラッコ：ライティング)
- 3. アカデミック・ライティングの基礎
- 5. 学会発表申し込み
- 6. 国際学会誌への論文投稿
- 9. 論文要旨執筆方法
- 11. 論文の推敲・校閲

今回は、合計300ページ以上のハンドアウト、その他の配布資料が格段に整備され、それらを授業の進行に合わせてMoodleサイト内に公開することにより、学習環境が一段と改善されました。

事前アンケートでは、期待する内容は、1)ライティング、2)ティーチング、3)英語コミュニケーションの順ですが、事後アンケートでは、役に立った内容は、1)と2)の順が逆転し、3)グループ討論となっています。ティーチングに関する講義内容は、ごく標準的なFDの内容ですが、大学院生がこれらについて体系的な教育を受ける機会はほとんどないようです。ライティングに関する講義内容は、さまざまな状況での執筆作業についてきわめて実践的な指導で好評でしたが、1週間のワークショップで特効薬のような成果が得られるはずもなく、根気づく地道な努力が必要なのことがわかったようです。

受講生が共通して挙げる良い点は、講義にクラス

全体あるいは少人数グループによる討論を組み合わせた双方向的な授業運営と、1週間の入念な準備による最後の2回のプレゼンテーションです。二人の講師の討論指導の手腕も高く評価されました。

授業で要求される作業量はたいへんハードで、毎日寝る間もなかった、土日も休めなかったという声が多くある一方、時間が足りない、もっと長い時間が必要という声もありました。

平均の出席率は95%を超え、みな熱心に取り組んだ結果、成績評価は「秀」90%でした。

受講生の構成は前回とほぼ同じで、3分の1(11人)が日本人、3分の2が留学生です。日本人受講生の増加を望む声もありますが、参加希望者約70人から受講生30人を選ぶ際に、研究科・専門分野別で不均衡がないよう調整はしますが、国籍・性別による調整はしていません。

受講生にはTOEFL500点以上を推奨していますが、事前の能力検定は行わないので、最初の1日で英語がついていけないと参加辞退の申し出が複数ありました。二人の講師の意見では、受講生の英語の能力はまったく問題がない、日本人学生は最初やや消極的で苦勞しているが、最後のプレゼンテーションでは立派な発表ができたそうです。

「アカデミックな英語」についてよりきめ細かな指導を望む声もありますが、それには別の企画が必要です。一方、ティーチングとライティングの基礎をより広範な大学院生に普及するためには、この内

容を日本語で開講する必要もあるでしょう。

専門分野別のよりきめ細かな指導を求める声もありますが、全学企画では、分野や国籍・文化の違いを越えたコミュニケーションをより重視しています。工学、水産科学、獣医学などの分野では、受講希望者が特に多いので、それぞれの専門分野に即したよりきめ細かな企画が期待されます。

留学生からは、たいへん有益な内容なので、帰国してから母国の大学に導入を働きかけたいという声もありました。

第12講として、人材育成本部の出村誠教授と工学系外国人留学生教育相談室のウィラワン講師によるシンポジウム「国際的キャリア養成の道すじ(ロードマップ)」、およびカリフォルニア州・ソノマ州立大学のアヤラ准教授の特別講演「学びにおけるユニバーサルデザインの高等教育への適用」も行いました。後者は今後日本でもFDの重要なテーマになる話題で、高い関心が寄せられました(写真1)。

2回のワークショップの経験から、この企画には本学の大学院生の熱い期待が寄せられていると感じます。また、講師のお二人もワークショップの継続に意欲的なので、昨年7月の筑波大学と、本学における本年2回のワークショップの経験を総括した上で、来年夏にもう1回、本ワークショップの開催を検討しています。

(文学研究科・准教授 瀬名波 栄潤、
名誉教授 安藤 厚)

写真1 第12講(シンポジウムと特別講演)
前列左から、瀬名波、ウィラワン、出村、脇田、ソラッコ、フォンヘーネ、アヤラ先生

カリフォルニア大学バークレー校での GSI 研修参加報告

2010年8月19, 20日にカリフォルニア大学バークレー校 (UCB) で開催された GSI (Graduate Student Instructor(大学院生講師):詳細はセンターニュース 82号を参照) 研修会に参加しました。この研修会では新学期から新たに GSI になる大学院生を対象として、2日間にわたって授業の進行方法などを学びます。日本とは異なり涼しい夏で、肌寒く感じることもありましたが、どこまでも青い空が印象的で、大学周辺は新入生を迎えるシーズンにあたりピンと張りつめた空気が漂っていました。

各大学での学習サポート活動

バークレー校の GSI 研修会参加に先立ち、周辺大学で取り組まれているアカデミック・サポート活動等に関するインタビューも行いました。

最初に訪問したスタンフォード大学では、戦後から TA (ティーチングアシスタント) を学部教育に使うようになったそうです。特に近年は大学院生の就職に教育経験が重視される傾向があるため、RA (リサーチアシスタント) よりも TA を選択する学生が多いそうです。また、アカデミック・サポートには 20 年前から取り組んでいます。大部分の学生は寮で生活しており、大学院生チューターも寮で指導を行います。学生の国際体験も積極的に推進していて、40% 以上の学生が海外で学ぶ機会を得ているというお話でした。

続いてサンフランシスコ州立大学を訪問しまし

た。ここでは少ない教員数で必要な授業を維持するためにオンライン授業の導入を進めていました。この先進的な取り組みの評価はこれからという印象を持ちました。

両大学ともそれぞれ Center for Teaching and Learning, Center for Teaching and Faculty Development という専門部署で専任スタッフが組織的に活動しています。他国からの FD 研修を受け入れたり、スタッフを他国へ派遣したりすることも積極的に行われています。アメリカの大学での教育改善活動が成果を挙げ、世界各国から注目されている様子が理解できました。

バークレー校 GSI 研修会

2日間の日程で、1日目は留学生の新人 GSI を対象とした研修会に 120 名、2日目は全新人 GSI 対象の研修会に 700 名が参加しました。大講堂での全体会では教員の講演や現役 GSI のパネルディスカッションがありました。テーマ別セッションでは多くのテーマの中から各自興味のあるものを選び、小教室でレクチャーを受けていました。

1日目は留学生対象で、英語に関するテーマが設定されていました。我々もそれぞれ「発音」や「教室で使う英語」のレクチャーを受けました。英語のレクチャーはベテランの教員が担当していました。1時間ほどのレクチャーでしたが、母音やアクセントなどに関して普段から意識するべき点、バークレ



写真1 研修会が開催された昼食時(参加者にはサンドイッチが配られた)の Wheeler Hall

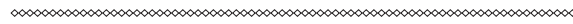
一校独特の言い回しなどを的確に示し、英語能力が比較的高いと思われる留学生たちにとっても意義のある内容のようです。続いて実際の授業の進行を練習しました。教室の空間全体を有効に使うようにとアドバイスがあり、事実ほかのレクチャーでも講師の現役 GSI は教室全体を動き回り、全学生に気を配っているのが印象的でした。

2 日目は大講堂での講演の後、それぞれの GSI が担当する授業分野別に午前、午後を通じて約 4 時間のレクチャーが開講されました(写真 1)。我々もそれぞれの専門分野を選択し参加しました。各レクチャーでは講師が課題を与え、それについてグループで討論し、結果を代表者が発表するというグループワークを中心に進行していききました。講師は学生の発言を促しますが、それを整理するにとどまり、新たな方策や模範解答を示さないというレクチャーの進め方も特徴的でした。続くテーマ別セッションでは「大学院生に対する授業」「課題解法を教えるテクニック」「授業中によくある間違いとそれを避けるためには」等 20 以上のテーマを取り上げていました。講師の大部分は現役の GSI で、彼らが

大学院生であることを考えると、そのレクチャーの進行能力の高さには非常に感心しました。これは GSI 制度が学生の教育能力の向上にも有効に機能している現れであると感じました。

UCB でも GSI Teaching and Resource Center という専門部署の専任スタッフが GSI 支援活動を支えています。全体で 700 名もの GSI がたびたび教室を移動しながらの研修会でしたが、混乱もなく、非常によく準備されているという印象でした。また、オンラインで多くの資料を提供していて、準備されているワークシートを指示通りに埋めていくことによって授業の準備ができるような工夫もされていました。ホームページ (<http://gsi.berkeley.edu/>) が公開されていますので、参考になります。

丸 2 日間にわたる濃密な内容でしたが、テンポよく進行する研修会で充実した時間を過ごしました。アメリカの学生、留学生と日本の学生との気質の違いも随所で感じられましたが、見習うべき要素は非常にたくさんありました。この経験を今後、本学で進めている TA 研修会などに活かせればと考えました。
(宮本 淳, 前田 展希)



研究大学におけるカリキュラム改革はどこへ向かうべきか —高等教育特別講演会—

7 月 16 日(金)に情報教育館 4F 多目的講義室(1)で、研究部特任准教授 Hye-Jung Lee (ソウル大学准教授) 先生による、表記講演会が開催されました。以下はその要約です。

いかなる国のいかなる大学においても、経常的なカリキュラムの検討とその改革は必須の条件になりつつあります。研究大学においては、研究と教育のバランスが大切ですが、卒業生の就職とカリキュラムの関係を度外視するわけにはいきません。現在、韓国の主要大学は、日本を超えてカリキュラム改革の体制を整えつつあります。

ソウル国立大学では、教育目標を職業上のニーズに合わせるだけでなく、新たな職業を創造できるような能力としています。そのため、単に知識を教

えるのではなく、知識を得るプロセスを教えなければなりません。学問を融合させてチームで教えることで思考の多様化を図ることも必要です。これらの実施に当たっては、学生同士の議論を尊ぶユダヤ人の教育が参考になるかもしれません。

ソウル大学の成績優秀な学生を対象に調査をしたところ興味深い結果が得られました。意外にも、彼らは自分自身を創造的であるとは考えていないのです。創造的な集団は他に存在し、成績はほどほどだが創造性に富んでいることを彼らは認識しているのです。自分たちは、絶えざる努力の結果成績が優秀であると考えています。この創造的な集団を引き出し、より良い教育を与える方法が必要です。

(細川 敏幸)

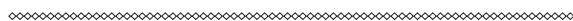
生涯学習計画フォーラム開催される

今年度第1回目の生涯学習計画フォーラムを9月1日、開催しました。当研究部門の客員准教授である中島英博 名城大学大学院大学・学校づくり研究科准教授が「大学職員の能力開発における課長職の役割」と題して報告しました。

生涯学習計画研究部門では現在、教育学研究院や総務部人事課、学務部教務課などと協力して「北海道地区大学SD研修『大学職員セミナー』」に取り組んでいます。このプログラムの一層の充実にあ資するべく、中島客員准教授には、大学職員の能力開発

(SD)をテーマとして私たちと共同で研究に当たっていただいています。今回のフォーラムでは、同准教授が今夏、本学を含む道内の複数の大学の課長を対象に実施したインタビュー調査に基づいて、大学職員の能力開発における上司の役割に焦点を当てて報告を頂きました。

フォーラムには、本学事務局の課長をはじめ教職員や、他大学職員が参加し、報告の後、職場での部下の指導法や研修プログラムのあり方などについて、活発な質疑・討論が行われました。(三上 直之)



「博物館ボランティアの集い」参加者を募集

博物館や美術館で活動するボランティアの実践を交流し、これからの活動の発展方向について学び合う「博物館ボランティアの集い」を、10月25日(月)、26日(火)に財団法人北海道開拓の村と当研究部門の共催で開きます。

今年のテーマは「住民の主体形成を支援する施設の学習環境と職員の力量形成」です。近年、自治体財政の悪化や指定管理者制度の導入などの変化の中、地域学習の拠点として博物館の地域における存在意義を確立しようとする取り組みが各地で行われています。今回の集いでは、博物館における学習支援のボランティア活動について講演や事例報告から学び、博物館を活用した地域住民の学びの方法や、コーディネーターとなる施設職員のあり方を探ります。

1日目の25日は北海道大学情報教育館で講演と

分科会、シンポジウムを行います。奈良女子大理事・事務局長の馬場祐次朗氏(前文部科学省生涯学習政策局社会教育官)が「住民の主体形成に関わる社会教育施設の使命」と題して講演。分科会では市立函館博物館・釧路市こども遊学館・北海道開拓の村の事例報告と討論を行います。2日目の26日は、北海道開拓の村の施設見学会です。ボランティアによる村内ガイドツアーに実際に参加し、野外博物館におけるボランティアの取り組みを見学します。

参加費(資料代実費)は1000円(当日受付時に支払い)。25日夕の情報交流会(懇親会)は別途3000円が必要です。参加申込や問合せは、北海道開拓の村事業課(TEL 011-898-2692, E-mail info@kaitaku.or.jp)へ。(木村 純)

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

高校生 38 名の全学教育科目の受講始まる

—北海道大学高大連携授業聴講型公開講座—

高校生による全学教育科目の授業聴講は、5回の試行を経て平成21年度から「北海道大学高大連携授業聴講型公開講座」として実施されています。今年度は、昨年度協定を締結した3校（札幌旭丘，札幌北，藤女子）から25名，今年度新たに協定を締結した3校（札幌南，札幌西，札幌開成）から13名，計38名（2年生23名，1年生15名）の生徒が総合科目9科目，主題別科目10科目，一般教育演習3科目を受講しています（表1）。

北大生と一緒に授業を受けることへの期待は大きく，高校生はそれぞれの興味や関心を深め，学問のおもしろさを発見しようと意欲にあふれて来学しています。

授業開始に先立ち，9月28日～9月30日にオリエンテーションを実施しました（授業日程の関係で学校別に実施）。高校生はまず情報教育館4階共用多目的教室（2）で全学教育科目の概要と受講の留意点などの説明を受けました。その後，高等教育機能開発総合センター及び周辺施設を歩き授業の行われる教室を確認し，附属図書館北図書館でガイダンスを受けました。

高校生の聴講をお認め下さった先生方の多大なご配慮とご協力に感謝申し上げます。当該事業の充実発展に向けてご支援とご助言をお願いいたします。

表1 平成22年度 高大連携授業，受講科目名，担当教員，受講者数

科目名	講義題目	担当教員	所属	受講者数
一般教育演習	近未来社会とマテリアル工学の夢	黒川 一哉	工学研究院	2
同上	建築と都市	小澤 丈夫	工学研究院	1
同上	聞く力・話す力のトレーニング	三上 直之	高等教育推進機構	1
総合科目：環境と人間	くらしと動物	鍵山 直子	獣医学研究科	1
同上	生体機能高分子が拓く先端生命科学	田中 勲	先端生命科学研究院	2
同上	食料生産と環境保全	野口 伸	農学研究院	1
同上	農耕地のバイオマス—食料，エネルギー，有用物質の生産—	山田 敏彦	北方生物圏フイールド科学センター	1
総合科目：健康と社会	なぜ病気になるのか？—治療医学から予防医学へ—	武蔵 学	医学研究科	4
同上	魚をたべる	一色 賢司	水産学研究院	1
総合科目：人間と文化	誰でもプログラミング	岡部 成玄	情報基盤センター	3
同上	国際広報メディア学入門	江口 豊	メディア・コミュニケーション研究院	1
同上	学際的な国境研究	荒井 信雄	スラブ研究センター	1
主題別科目：思索と言語	言語と倫理の哲学—入門—	野村 恭史	文学研究科	1
主題別科目：芸術と文学	見るべき映画監督と作品	西 昌樹	メディア・コミュニケーション研究院	2
同上	怪物論	武田 雅哉	文学研究科	2
同上	日本美術史入門	鈴木 幸人	文学研究科	1
主題別科目：社会の認識	呪術・科学・宗教・神話を考える	宮武 公夫	文学研究科	3
同上	格差社会を考える	平澤 和司	文学研究科	1
同上	シンクタンク入門II 産業企業の国際化に触れる	宮部 潤一郎	メディア・コミュニケーション研究院	1
主題別科目：科学・技術の世界	人間を操るもの—報酬と罰の心理学—	和田 博美	文学研究科	2
同上	地球惑星科学のフロンティア	池田 隆司	理学研究院	4
同上	ゼロから始める「科学力」養成講座2（自然科学2）	鈴木 久男	理学研究院	2
計	22 科目	22 名		38 名

平成 21 年度高大連携授業受講生調査から

平成 21 年度は、新型インフルエンザの流行にともなう高等学校の学級閉鎖等で、高校生が本学の授業に出席できないことも多くありましたが、受講を取り消した 1 名を除き全員 (17 名) が基準を満たして受講証明書の交付を受けました。

受講終了後の質問紙調査によると、15 名が受講した目的を「とても」または「ほぼ」達成したと回答し、「大学での勉学について展望を得る」など受講の有用性に関する 9 項目の評定値の平均は、5 段階評価の 4.3 で有意義な体験であったことが示されました。授業の内容については、受講生の半数が

「理解できた」、2 名が「理解できなかった」と回答し、北大への進学に対する気持ちの変化については、10 名が「非常に」または「やや」強くなったと回答しています。15 名は高校の勉強や学校行事との両立ができたこと、11 名が附属図書館を利用したことがわかりました。

また、北大生との交流の機会や受講を通して得られたことなどに関する自由記述からは、高等学校では得られない学習経験の具体的な内容の一端を窺うことができました。今後も授業聴講型公開講座の意義と有効性について、実証的なデータに基づき考察していきたいと思えます。(山岸 みどり)

科学技術コミュニケーション CoSTEP

写真展「足尾銅山—日本の近代化を支えた科学技術の光と影—」 の開催

CoSTEP では、科学技術コミュニケーションの教育研究において、科学技術と人間の関わり方について考える機会となるイベントとして記録写真展を開催いたします。

2010 年は、足尾に銅鉱脈が発見されて 400 年にあたります。足尾銅山は当時の貴重な外貨獲得源として積極的に開発されましたが、現在に比べて未熟だった精錬技術や、急激な樹木の伐採によって環境破壊を引き起こし、地域住民に鉱毒被害をもたらしたことは広く知られています。

その一方で、諸外国から足尾銅山に導入され、日本で改良された採掘技術や精錬技術は、まさに当時の世界最先端であり、各国から視察団が訪れるほどでした。

すでに廃坑となった足尾銅山は、現在関連施設の取り壊し作業が急ピッチで進められ、操業当時の様子を知ることは非常に難しくなっています。

日本初のフォト・ジャーナリストとも評される小野崎一徳氏が、当時の坑道内部の撮影を行っていたことが知られていますが、写真乾板は戦時中に接収され、ほとんど残っていません。現在、一徳氏の

孫にあたる小野崎敏氏が、残された写真を精力的に収集しており、未整理のまま残されています。

今回、一徳氏が撮影した未公開作品も含んだ写真を展示します。現在ではこれらの写真でしか確認することができない設備、坑道内の掘削状況、精錬過程、さらには労働者の普段の生活など、科学技術史ならびに科学技術コミュニケーションの観点から見て大変貴重な写真を展示いたしますので、ぜひご覧ください。(藤田 貢崇)

開催期間：2010 年 11 月 1 日 (月) ～ 12 日 (金)
10:00 ～ 18:00 (平日のみ) (最終日は
16:00 まで)

場 所：北海道大学 エンレイソウ 1 階 ギャラリー

※本写真展は、10 月 22 日 (金) 開催の三省堂サイエンスカフェの関連企画です。22 日のカフェでは、小出五郎氏 (科学ジャーナリスト・元 NHK 解説委員) が小野崎一徳氏のジャーナリストとしての面を紹介します。こちらにもぜひご参加ください (詳細は <http://costep.hucc.hokudai.ac.jp/costep/news/article/73/> を参照)。

CoSTEP 教育スタッフ紹介

特任准教授 石村 源生

私はもともと認知心理学の研究者をしておりましたが、その後科学技術館に転職し、科学館・博物館の基本構想立案、展示企画ディレクション、運営コンサルティング、などの業務に携わって参りました。

その時の経験をもとに、2005年9月よりCoSTEPでの科学技術コミュニケーションの教育・実践・研究に携わっております。

CoSTEPでは、通常の教育業務の他に、昨年度東京の国立科学博物館で開催された大学サイエンスフェスタに北海道大学として出展した際の統括ディレクションなどをさせていただいております。また、大学の情報を社会に向けて発信するためのウェブサービスの企画ディレクションも行っており、Science and You (<http://you.costep.jp>)などを制作しました。今後は、センターのミッションに貢献できるようにより一層努力して参りたいと存じます。

特任准教授 藤田 貢崇

CoSTEPでは主にライティングの指導を担当しています。これまで、高校の理科教員、研究機関での研究員、科学技術振興機構で競争的研究資金申請の審査業務などを経験し、

これらの業務の傍ら、科学ジャーナリズムの記事や、一般向け翻訳書などの執筆を行ってきました。ライティングは、文字通り「文章を書くこと」ですが、日常生活に密着していることもあり、正面から向き合うことが難しい分野でもあります。大学の教育面では、欧米ではライティング・メソッドが確立し、入学後すぐに指導されますが、日本ではそのような教育は行われていません。CoSTEPでのライティング教育を、これからの優れた研究者や科学技術コミュニケーターの育成につな

げていきたいと考えております。

特任講師 大津 珠子

大学の中にデザイナーの居場所なんて本当にあるのかしら…半信半疑でCoSTEPに参加した6年前がなつかしく思い出されます。今年4月より北大の一組織となり、再びスタートラインに立たせていた

だいたこと、心から感謝しております。

デザインのプロセスは、目の前にある課題に対して通常の「見方」や「感じ方」を変えてみることからスタートしますが、デザインに初めて取り組む受講生にとっては「楽しい」より「苦しい」作業かもしれません。恒例となっているサイエンス・カフェ札幌は今年11月で54回目の開催となり、毎回欠かすことなく受講生が取り組んできたポスターは私のおかげがえのない財産となっています。CoSTEPのサイトでその制作過程も紹介していきますので、ぜひご覧下さい。ふり返るとグラフィックデザインの授業のほか、「大学の中でどうやったら楽しむことができるか?」「どんなお祭りができるか?」…熱心に考えて過ごしてきたような気がします。高等教育推進機構のメンバーとして、若さと活気のある学生さんたちに囲まれながらも、ハートだけはいつまでもフレッシュでいようと思っています。

特任助教 早岡 英介

私は大学に来るまで東京のTV番組制作会社で働いていました。修士課程で環境計画を専攻していましたが、研究以外にも問題解決に役立つ仕事があるのではないかと考え、まず就職したのが新聞社でした。しかし活字メディアより映像の方が自分に向いているなと思い、TVディレクターに転身しま

した。最初は「やってみよう何でも実験」という番組でひたすら実験を繰り返す日々でした。次に、ワンダーフォーゲル部出身でアウトドアや生物に詳しいことを生かして、国内外で自然番組を作りました。その後、「サイエンス ZERO」の制作などを経て、結局11年間科学番組中心にディレクターをやりました。今はこうした経験を生かして、科学コミュニケーション教育という全く新しい仕事にチャレンジすることになり、新鮮な刺激に満ちた日々を送っています。こんな少し変わった経歴の人間ですが、映像や音声メディアのことで何か相談があれば、遠慮無く声をかけてください。

特任助教 竹本 寛秋

出自は日本文学研究ですが、大学院時代から気が多く、ゲーム会社に入り込んでデジタルゲームを制作したり、ネットワーク技術に関する解説書を書いたりしてきました。前任

校では、大学のラーニングマネジメントシステムの運営をしながら、講義の収録やデジタル教材作成などを行ってきました。

CoSTEPにおいても、科学技術コミュニケーションの可能性をさらに広げていくために、できるかぎり多くのチャンネルで活動していければと考えています。デジタル・インタラクティブコンテンツの活用など、やってみたいことはたくさんあります。また、まだ試行錯誤しながらではありますが、科学技術コミュニケーションについて批判的に考えるための演習をスタートさせました。科学技術コミュニケーションがさらに発展するために何が必要なのか、微力ながら力を尽くしていきたいと思えます。

博士研究員 齊藤 健

札幌生まれ、札幌育ちですが、一時期、九州と英国に住んでいたこともあります。本学の大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程を修了し、博士(文学)を取得。博士論文では、数学の哲学における構造主義について論じました。大学や専門学校で非常

勤講師として数年間、「哲学」「デジタルメディア入門」「情報倫理」「文章構成論」「国語表現論」などの授業を担当したり、シンクタンクの研究員として北海道の経済・産業・社会を調査したりしていました。その後、文学研究科の応用倫理研究教育センターでの勤務を経て、一昨年からCoSTEPで働いております。

CoSTEPでは現在、北大の広報誌『リテラポプリ』を企画・制作する実習など、ライティング関係の授業を中心に担当しています。特技は小学校からやっていた柔道で、趣味は旅行・温泉めぐりです。皆さま、どうぞよろしくお願ひいたします。

博士研究員 鳥羽 妙

前職は東北大学で、CoSTEPには2010年4月から赴任しています。あたふたと春を過ごし、札幌とは思えない暑さの夏を乗り越え、あっという間に秋になってしまいました。

この先の冬の過ごし方を今から心配しています。元々は森林に関係する「水」をテーマに研究をしていました。森林→水→エネルギー→原子力→科学技術コミュニケーションという流れで現在に至っています。今でもそれぞれの分野にかかわっているため、範囲が広くて追いついていないとは言えません。しかし科学技術コミュニケーションというくくりの中では足りないぐらいでしょうか。これからも「広く」「深く」やっていきたいと思っています。

客員准教授 古田 ゆかり

「心に落ちる伝え方、行動につながる発信」に関心を持っています。専攻は化学、職業は物書き&編集者&プランナー&プロデューサーなど。テーマは生活と社会、そして科学のつながり。主なターゲットは科学を専門としない人と特定の分野にのみ関心を持っている人です。人・コト・分野をつないで想いを形にするためにはメソッド、メディアは選ばれません。

CoSTEPでは、『科学館通信 企画・制作実習』

を担当し、受講生とともに大学と科学館、市民を結ぶためのメディア開発と制作に取り組んでいます。好きなものは科学館と落語ですが、古今亭志ん朝のライブを一度も聴いていないことを日々悔やんでいます。

客員准教授 渡辺 保史

CoSTEP では客員准教授として情報デザイン分野の授業に関わっています。長らくフリーランスで仕事をしていて、「ジャーナリスト」という肩書きでは説明しにくい中身や領

域を扱うことが増え、いつも自己紹介に悩んでいました。いつの頃からか「かく仕事」(執筆や編集)と「つくる仕事」(企画やディレクション)と「おしえる仕事」(講義やワークショップ)の3本柱で活動しています、と説明して何となく納得してもらえるようになりました。得意分野は「インターフェイス」全般。といっても情報工学ではありません。異分野の知見をつなぐメディアをつくることに、楽しさと生きがいを感じています。CoSTEPに加え、環境科学院 GCOE プログラムのコーディネーターを兼務しています。大学と社会の新たなインターフェイスをデザインしたいと、日々試行錯誤しているところです。

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

平成 22 年度第 1 学期学習サポートの利用状況

アカデミック・サポート推進室(10月よりアカデミック・サポートセンターに改称)では、全学教育科目を受講する学生を対象とした主体的学習支援の一環として、「学習サポート」を行っています。これは学生からの学習に関する質問に、推進室スタッフと科目ごとの大学院生チューター(TA)が、個別対応でアドバイスを与えるものです(写真1)。今年度第1学期は、数学、物理などの基礎科目と、英語、中国語などの外国語科目、また文章添削や情報学といった基礎的スキルの担当時間を設け、4月19日から8月13日まで実施しました。

期間中の利用状況は表1の通りです。平均して1日に4人弱、120分程度の利用がありました。利用者の9割弱は1年生で、その半数以上は複数回の利用者でした。開室時間に対する実際の利用時間の比(稼働率)は、科目や週によっても大きく異な

りますが、平均40%弱でした。科目別では、数学や物理の質問が比較的多く、主に理系の学生に活用されています。

利用者へのアンケートでは、利用した理由は「チューターが大学院生であり相談しやすい」「場所や時間が都合よい」がおおよそ7割あり、満足度も高く好評です。今後さらに利用が増えれば、オフィスアワーなどをうまく補完して機能すると期待できます。

学習サポートは第2学期も継続して行います。今後この制度を学生にとってより有益なものとするために、実施内容や方法は随時改善していきたいと考えていますので、ご意見、ご質問などがありましたら、アカデミック・サポートセンターまでお知らせいただければ幸いです。(齊藤 準, 日吉 大輔)



写真1 チューター室 (N106, N107)

表1 利用状況 (平成22年度第1学期)

	全体	1日平均
開室日数	78	—
開室時間	405時間	5.2時間
利用件数	233	3.0
利用人数	280(内1年次240)	3.6

北海道大学オープンコースウェアの新規公開科目(2010年6～8月)

北海道大学オープンコースウェアでは、本学が公開している講義およびその資料をはじめ、公開講座等の映像など、大学や教員が取り組んでいる各種教育活動の情報をインターネット上で無償公開しています。2010年6～8月には公開講座等21コース(表1)を新たに公開しました。

この間のアクセス状況は、月間の平均で約26万ページビュー、約4.4万ビジット、約3.5TBのデータ転送量となりました。6～7月は特にアクセス数が急激に増加しました。これは、5月に映像を公開した、北海道大学大学院文学研究科・人文学カ

フェ実行委員会主催による「人文学カフェ 村上春樹「1Q84」を読む」(講演者：中村三春・文学研究科教授)の人気の高かったためです。2006年のWebサイト公開以来の累計では、約522万ページビュー、約119万ビジット、約18TBのデータ転送量を記録しています。

今後も引き続き、大学で培ってきた知識を社会に還元するとともに、教育資源アーカイブとして学内の教員、学生が利用できるように、教育活動に関する情報や映像を収集・公開していきます。

(合川 正幸)

表1 新規公開科目一覧 (2010年6～8月)

公開講座／セミナー (21コース)	ひらめき☆ときめきサイエンス 北海道の魚たちの由来をたどる 宗原 弘幸ほか
北海道大学公開講座 ポスト政権交代の政治学 吉田 徹	ひらめき☆ときめきサイエンス 北大農場でベリーの品種改良に挑戦しよう! 星野 洋一郎ほか
北海道大学公開講座 環境変化と越境的取り組み 白岩 孝行	サイエンス・カフェ札幌 北海道の地域産業を元気にしたい! 須田 孝徳
北海道大学公開講座 ネットワーク時代の光と影 : 守れるかセキュリティ 工藤 峰一	ノーベル賞講演会 The Ribosome: The cell's protein factory and how antibiotics block it Venki Ramakrishnan (英国MRC研究所)
オープンキャンパス 総合入試特別プログラム 喜多村 昇ほか	計算科学連続セミナー 次世代計算核物理を目指して 青山 茂義 (新潟大学)
北海道大学教育 GP 博物館と自然環境 佐藤 利幸 (信州大学)	学術コンテンツの共有 オープン映像コンテンツ共有環境の構築と実践 仲西 正 (NTT)
北海道大学教育 GP 知られざる北海道写真の展覧会をつくる 谷古宇 尚	セミナー/講演会 農業再生 柳村 俊介ほか
北海道大学教育 GP 北大の教育改革の15年 安藤 厚	セミナー/講演会 北海道大学教育ワークショップ 脇田 稔ほか
北海道大学教育 GP 次世代FD・TAが支える大学教育の新たな展開 細川 敏幸	セミナー/講演会 のりさんと科学を語ろう!! 佐藤 のりゆきほか
北海道大学教育 GP 地域教育の行方 印南 比呂志 (滋賀県立大学)	
土曜市民セミナー 民主党政権の温暖化対策 石井 寛	
土曜市民セミナー ベーリング海峡を渡った恐竜 石田 祐也	
土曜市民セミナー 北海道の博物館の未来 松枝 大治ほか	

日誌 EVENTS, June-September

6月

- 1日 (会議) 平成22年度第2回学生委員会
- 2日 (会議) 科学技術コミュニケーション教育研究委員会
- 3日 (説明会) 宗谷地区/大学・短期大学進学相談会(稚内)
- 4日～5日 (研修) 教育ワークショップ(奈井江)
- 15日 (会議) 第151回全学教育委員会小委員会
- 15日 (説明会) 札幌北陵高校主催進学相談会
- 17日 (説明会) 札幌光星高校主催進学相談会
- 17日 (訪問) 札幌厚別高校
- 18日 平成23年度AO入試・帰国子女入試学生募集要項公表
- 19日 (行事) 教育学部オープンキャンパス
- 23日 (会議) 第57回教務委員会(持ち回り)
- 29日 (行事) 北海道11国公立大学進学コンソーシアム2010 in 函館

7月

- 1日～29日 (行事) 北海道大学公開講座(計8回)
- 1日 (会議) 平成22年度第3回学生委員会
- 1日 (説明会) 北海道高校主催進学相談会
- 2日 (会議) 平成22年度第1回センター予算施設委員会(持ち回り)
- 4日 (行事) 第1回キャンパスツアー
- 6日 (訪問) 旭川凌雲高校
- 10日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2010(東京)
- 11日 (説明会) 外国人留学生のための進学説明会(東京)
- 12日 (会議) 平成22年度第2回センター予算施設委員会
- 15日 (説明会) 主要国公立大学・私立大学合同進学ガイダンス(東京)
- 16日 平成23年度入学者選抜要項公表
- 16日 (研究会) 高等教育特別講演会
- 18日 (説明会) 外国人留学生のための進学説明会(大阪)
- 19日 (行事) 北大セミナー in 旭川
- 21日 (会議) 第152回全学教育委員会小委員会
- 21日～27日 (ワークショップ) 第2回大学院生のための大学教員養成(PFF)講座
- 23日 (説明会) 北海道大学入試説明会(高校教諭対象)
- 24日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2010(大阪)

- 25日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2010(横浜)
- 30日 (会議) 平成22年度第3回教育改革室会議
- 31日 (行事) 北大プレオープンキャンパス2010

8月

- 1日～3日 (行事) オープンキャンパス(札幌キャンパス)
- 2日～3日 (行事) オープンキャンパス(函館キャンパス)
- 2日 (会議) 第81回全学教育委員会
- 5日～19日 (会議) 平成22年度第4回学生委員会(持ち回り)
- 7日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2010(名古屋)
- 8日 (説明会) 主要大学説明会(札幌)
- 16日 (説明会) 主要大学説明会(広島)
- 19日 (会議) 平成22年度第4回教育改革室会議
- 19日～20日 (研究会) IDE大学協会北海道セミナー
- 23日 (説明会) 主要大学説明会(新潟)
- 23日 (研究会) IRシステム・ワークショップ(同志社大)
- 24日 (会議) IRシステム大学学生調査部会(同志社大)
- 27日 (説明会) 大学・短期大学進学相談会(札幌)

9月

- 1日 (研究会) 生涯学習フォーラム
- 2日 (会議) 第2回センター運営委員会
- 2日 (会議) 第58回教務委員会
- 2～3日 (会議) 東北・北海道地区一般教育研究会(札幌大)
- 8日 (会議) IRシステム構築部会(TV)
- 11日 (行事) 北大セミナー in 十勝
- 13日 (会議) 全学教育科目責任者会議(全体会)
- 15日 (説明会) 秋田南高校に対する大学説明会(プロフェッサー・ビジット企画)
- 22日～28日 (会議) 平成22年度第5回学生委員会(持ち回り)
- 25日 (説明会) 進学セッション2010札幌
- 26日 (説明会) 大学進学フェスタ2010 in YOKOHAMA
- 28日 (会議) クラス担任連絡会

行事予定 SCHEDULE, October-December

- | | 【日(曜日)】 | 【行事】 |
|-----|---------------|------------------------|
| 10月 | 1(金) | 第2学期授業開始日 |
| | 1(金)～7(木) | 抽選科目の申込期間 |
| | 12(火) | 抽選科目の結果発表日及び追加申込日 |
| | 13(水)～19(火) | 平成18～22年度入学者履修届 Web 入力 |
| | 13(水)～14(木) | 平成17年度以前入学者履修届受付 |
| 11月 | 21(日)(予定) | AO入試・帰国子女入試 |
| 12月 | 8(水)～10(金) | 履修登録した科目の取消し受付 |
| | 27(月)～1月4日(火) | 冬季休業日 |

ニュースレター 2010, No.84 目次

総合入試の導入にあたって 脇田 稔 1	研究大学におけるカリキュラム改革はどこへ向かうべきか—高等教育特別講演会— 15
高等教育推進機構として新たな出発 4	生涯学習計画フォーラム開催される 16
東北・北海道地区大学一般教育研究会 5	「博物館ボランティアの集い」参加者を募集 16
北大教育 GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」における社会体験型科目の成果と課題 湯浅 万紀子 6	高校生 38 名の全学教育科目の受講始まる—北海道大学高大連携授業聴講型公開講座— 17
全学教育委員会報告 (第 81 回) 8	写真展「足尾銅山—日本の近代化を支えた科学技術の光と影—」の開催 18
クラス担任からひとこと 川端 潤, 菅原 広剛 10	CoSTEP 教育スタッフ紹介 19
新時代の学習サポートを探る ～ IDE 大学セミナー開催される～ 11	平成 22 年度第 1 学期学習サポートの利用状況 21
第 2 回「大学院生のための大学教員養成 (PFF) 講座：ティーチングとライティングの基礎」を開催 12	北海道大学オープンコースウェアの新規公開科目 (2010 年 6～8 月) 22
カリフォルニア大学バークレー校での GSI 研修参加報告 14	日誌・行事予定 23
	目次・編集後記 24

編集後記

この夏、札幌芸術の森美術館で「スタジオジブリ・レイアウト展」を鑑賞しました。レイアウトとは、アニメの登場人物の配置や動き、背景、特殊効果の指示を、各場面 1 枚ずつの紙に詳しくかき込んだ鉛筆画です。アニメづくりの作業は、作画や背景、CG などに細分化されています。これらを監督や演出家の意図のもと集中管理し、統一感ある作品を生み出すための設計図がレイアウトです。このレイアウトを活用した制作システムは、今では標準となっていますが、もとは宮崎駿氏が 1970 年代に「アルプスの少女ハイジ」のテレビ放送に迫われ、試行錯誤する中で確立したものだそうです。創造的な成果を生み出すシステムは外から安易に移植できるものでなく、優れた才能がより質の高いものを目指して奮闘する現場でこそ育まれる、という好例だと思います。1300 点の鉛筆画は、それを圧倒的なボリュームで語りかけているようでした。(猶)

ニュースレター (旧「センターニュース」)
(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算第 84 号

発行日： 2010 年 10 月 1 日
 発行元： 北海道大学高等教育推進機構
 (旧高等教育機能開発総合センター)
 〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
 電話 (011)706-7520・FAX(011)706-7854
 編集委員： 西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅
 木村純・亀野淳・三上直之・瀧澤一騎
 山岸みどり・鈴木誠・池田文人
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
 電話：(011)706-7514;FAX(011)706-7521
 インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>